
花の条件

九条 眠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の条件

【Nコード】

N6534Y

【作者名】

九条 眠

【あらすじ】

人を愛せない少女、セチア＝マリ＝

人を愛さない青年、ガウラ＝レウィシア

少女はある秘密を持った名家の長子。

青年は名家に派遣されてきた執事。

二人の出会いがもとで様々なことが起きていく・・・

ブローグ

私は誰も愛さない。だから、誰も私を愛してくれない。
その方が楽。

裏切られるのが怖いから。

去って行ってしまうのが怖いから。

私は誰も受け入れられない・・・一人を除いては。

私の名前は、セチア＝マリ。

花の好きな母が私の生まれた12月に咲くポインセチアとローズ
マリーを掛け合わせてつけたらしいです。

だけど、母や父には私を愛する余地なんてありません。

妹のリラ＝クレマチスが家族や、ほかの誰をも魅了しているから。
リラとクレマチスは暖かい季節に咲くとても美しい花です。

だから、妹は誰からも愛されているのです。

それだから、母は私の世話をしたがりません。

父は仕事に出て滅多に帰ってこない。まあ、彼も私を愛してはく
れませんが。

だから、私の世話は執事がやっている。

だけど、私のことが嫌になってすぐ入れ替わってしまう。

もう、私の所には2つの紹介所から全員が出払ったけど、一人も
私にあつた人はいなかった。

この間の人なんて、2日で出て行ったんだから。

彼らは仕事だけど、仕事でも私には耐えられないみたい。

今日もある紹介所から一人の男が来る予定です。

期待はしません。

だって、どうせすぐいなくなるんですから。

花には水を・・・

今日の正午ごろ、部屋に急に男が入ってきました。

名前はガウル「レウイシア」。

年は私より3歳年上。18歳だといいます。

端正な顔立ち、流暢で美しくて、ある意味では古臭い言葉づかい、まるで老紳士のように落ち着き。

18歳には見えないけれど、所詮はただの青年。

数日たてばいなくなるものと思います。

そんなことを思いながらも、読書をしていました。

気が付くとティータイム。

ガウルが何かを持ってきました。

だけど、私はティータイムをしないので彼が来たのはどうしてだか。

「お嬢様、紅茶かコーヒーどちらにいたしますか？」

彼はにこやかに聞きました。

「私はいらない。多分、紙に記載されてるんじゃない？私の世話は掃除と洗濯とご飯だけよ。」

しかし、彼は一向に引きません。

それどころか、私の横の椅子に掛けたのです。

「お嬢様、そうは言ってもティータイムは私達に許された至福の時でございます。この時だけは誰にも文句をつけられりしませんだから、たとえお嬢様であっても、私はお茶をおすすめしてもよいのです。」

急に無茶苦茶な持論を唱え始めました。

「おすすめしてもらったけど本当にいらないと答えておくわ。甘ったるい匂いが嫌いな。」

ガウルはいままでで一番押しが強いが、これを言えば引き下がるという考えがあった。

「では、お嬢様・・・」

よし！効いた！

そう思ったのもつかの間。彼の口からは衝撃の一言が飛び出した。
「私だけでティータイムとさせていただきます。」

そういつて、お菓子を取り出して、紅茶をカップに注ぎ始めた。

「ちよつと、待ちなさい。私は匂いも嫌いって言ったのよ。ここで飲まないでちょうだい。」

きつく言つと彼は無表情のままこういいました。

「いえ、この時間だけは誰にも文句はつけられないのです。お嬢様でも、です。」

そう言つて、お茶を啜つた。

久しぶりに嗅ぐ紅茶の匂いはとてもいい香りと思わず、

「ねえ・・・」

「はい、どういたしましたか？」

いかにも、文句つけんなよ的な顔をして、それでもにこやかに振り向いた。

「私にも紅茶を入れて。それとマカロンを2つ。」

少し気恥ずかしかったけど、思い切つて言つてよかった。
だつて、とってもおいしいんだもの。

「やはり、花には水を上げなくてはいけませんね。」

意味ありげにほほ笑みながら彼は言いました。

「どういう意味よ、それ。」

「いえ、お嬢様は大変お美しい。」

「そんなお世辞はいらない。花がどうのこうの言つてたじゃない。どういう意味？」

彼は目だけが笑つていて、とても外見で得をするタイプ。

だから、さらつと何事もやり過ごして来たのだろつ。

だけど、私はそんなことはさせない。

「言つて。執事でしょう？さあ、早く」

我ながらとても悪い笑い方だつたと思う。

彼は、ふう、と息をついた。

「やめたきや、やめなさいよ。私が面倒でやめていったやつがいっぱいいるんだから。」

私は冷めた目つきで彼を見た、けれど、彼は困った顔一つしない。「お嬢様は、本当にお美しいのですよ。だけど、この狭い空間だけでほとんど生活しておられるお嬢様には足りないものがあるのです。それが水なのです。」

「水なら毎日、一定量飲んでるわよ。」

こんなに馬鹿にされたような会話を続けているうちに私は腹が立つてきました。

「いえ、飲料水ではありません。お嬢様は外見的にもとてもお美しゅうございます。しかし、本来ならば、内面もお美しいはずでございます。ですが、水が足りていないのですよ。つまり、生活のうるおい、人との関わりです。」

確かに人とは関わり合いになりたくない一心だけど、私には、関わることのほうがよっぽど疲れて枯れてしまいそう。

最後にこんなに長々と話したのはいつ振りなのか、もうそれすらわからない。

「それで、私に餌づけしている気分なの？水を与えているってことは、」

「いえ、滅相もございません。」

静かにほほ笑んでため息をついた。

「やつぱり、思っているじゃない。」

「いえ・・・もう、ティータイムは終了ですね。楽しかったですか？お嬢様」

初めて、人と話すことが楽しいと思った。

だけど、ガウルと話すとなぜだか、反対のことを言ってしまう。

「あなたなんて相手にならないけど、また来てもいいわ。」

ガウルはにこりとほほえんだ。

「そうだ、ガウル、今晚、部屋に来て頂戴。あなたの話を聞かせ

て。」

彼は少し困った顔をしながらも、頷いた。

「ええ、大したお話はできませんが。」

ガウルは一礼して出て行った。

なぜが、大した時間でもなかったのに、宝物のように感じられた。

今日の夜がとても、楽しみ。

楽しみだなんて思ったことないのに、そう思ってしまった。

今日一日で、人生15年間で初めてのことにたくさん出会いました。

花には水をあげなくては。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6534y/>

花の条件

2011年11月20日07時18分発行